ぎない。

（五）現状と解決策。

以上のごとく，「歴史的」および「資料的」にこの問題に最終決定を与えることは不可能に近い。現在，日本側の「強み」はサンフランシスコ講和条約の最終版をタテに取って，国際法および国際社会に訴えうる点である。同講和条約では「竹島は日本の領土」としたからであり，事実「李ライン」に対してはアメリカを先頭に中国も含めた国際社会はこれを批難した。他方，韓国側の「強み」は朝鮮戦争以後50年以上におよぶ独島の「実行支配」の事実である。独島には種々機材が投入され，接岸設備や灯台，宿泊施設などが建設され，韓国警備隊が駐屯しており，さらには愛国者が居住さえしている。また上述したように，この問題が韓国では，「日帝植民地」そのものを象徴する全国民的関心である点も韓国の強みと言えなくはない。

こうした現状のなかで，この問題を冷静な話し合いで解決しうる見込みは皆無に近い。果して「竹島・独島」問題には，こうした現状下，どのような解決策が可能であろうか。

テレビにもよく登場している重村智計教授（日朝関係論）は，この竹島・独島問題を実は「すでに一応の解決の道筋で双方が合意している問題」だと見る（『韓国ほど大切な国はない』東洋経済新報社，1998)。つまり，両国は互いに自国の領土だと主張し記録しつつ，しかも現実的には「李ライン」はもはや解消され，竹島水域は日韓が共同管理する「暫定水域」として合意しており，それにふさわしい「漁業協定」が施行されているのであれば，これは現状下における一つのもっとも好ましい解決にほかならない，と見るのである。日朝関係論の専門家や，竹島問題の根の深さを知る人間には，この種の解決方策を取る者が多い。もとより，それが最終的解決ではないことは百も承知の上だ。しかし，今すぐ「シロ，クロをつけよう」とする態度こそ，実はかえって「竹島・独島問題」への「解決」から最も遠いのである。(なお，この問題にさらに関心のある学生諸君に是非すすめたい一冊の本がある。下條正男『竹島は日韓どちらのものか』文春新書，2004。類書がまったくと言ってよいほど存在しないなか，本書の価値は高く，その内容もきわめて秀れている。本稿の「地図」も同書から引用掲載させていただいた)。

メキシコの定番デザート、チュロスとチョコラテ

経営学部
丸谷雄一郎

私が本格的なチュロスと出会ったのはメキシコの高原都市として有名なサン・ミゲル・デ・アジェンデのサン・アグスティン（San Agustin）というカフェであった（カフェの住所など詳細は，『フィガロ・ジャポン』2004年６月５日号114頁を参照)。メキシコというとソンブレロや常夏というイメージを持つ人が多い。しかし，メキシコシティを含めてその中心部は高地であるため，ソンブレロのイメージ通り日差しは強いのだが，気温は高くはなく，メキシコシティなどを訪れるとその涼しさに驚く人が多いのである。中央高原は植民地時代に銀などの資源を求めて多くの都市が作られ，メキシコの独立運動やその後のメキシコ革命の際にも中心となった地域である。街並みの多くは近年世界遺産に指定され，観光地として再び注目を集めている（メキシコの高原都市について詳細は，邸景一，飯田辰彦，原川満『メキシコ・中央高原～コロニアル・シティーの魅力（第２版)』日経ＢＰ社，2005年を参照)。

サン・ミゲル・デ・アジェンデはメキシコ中央高原の中心都市グアナフアトから東へ，車で２時間程の植民地時代の面影が強く残るコロニアル都市である。メキシコ人が「最も美しい都市」と称するだけあり，カラフルな建物と坂の多い石畳が印象的な街並みを作っている。日本でも公開されたアントニオ・バンデラス主演の『レジェンド・オブ・メキシコ』はここを主要なロケ地としており，米国人が持つメキシコを象徴している。近年，多くの外国人が有名な美術学校（アジェンデ美術学校）や現地の語学学校に留学し，さわやかな気候や現地の芸術的な雰囲気に惹かれて移り住むようになった。そして，彼らが経営する洗練されたインテリアショップに観光客が大挙押し寄せ，その観光客目当ての店舗が多く開店するというサイクルが生まれている。

サン・アグスティンもこうしたサイクルに乗って開店した店舗であり，サンフランシスコ教会のすぐ前に立地する。オーナーは有名なTV女優マルガリタ・グロリアさんであり，店内にはオーナーの写真が多く飾られている。オーナーは店に頻繁に来ているようであり，私がお店に行った時にも店長らしき人と打ち合わせをしていた。内装はこの街のコロニアルな雰囲気に惹かれて詰め掛ける米国人を標的としているためか，米国人がイメージするメキシコそのものである。外壁はチョコラテ(ホットチョコレート)を思い起こす薄い茶であり，内壁は薄い黄色で塗られ，棚や壁には大きな皿などの陶器が飾られ，木の格子状になっている。天井にはサン・ミゲル特産のかごなどの民芸品が飾られている。

チュロスは植民地時代にスペインからメキシコに流入した，薄力粉と強力粉の生地をあげたものにシナモンシュガーをまぶしたデザートである。メキシコの屋台のデザートとしても定番のスナックであり，日本でもミスタードーナッツが製品化している。しかし，サン・アグスティンのチョロスは日本のチョロスと見た目は同じなのだが，味が全く違った。食感がサクサクでありながら，噛むともちもちしていて，シナモンが後味を上品に仕上げていた。先日，ニューヨークで本場のベーグルを食べて驚いたのと同じ感覚だったのだが，食感というのは大量生産ではまねるのが難しいらしい。厨房はオープン・キッチンとなっており，職人のおじさんがところてんを押し出す時に使う機械を大きくしたようなもので，チョロスの生地を油の中に押し出し，手際よく引き揚げ，シナモンシュガーを振っていた。おじさんはメキシコ人らしく非常に楽しそうに仕事をしており，私がどのように作るのかと見ていると，「どこから来たんだ」と愛想良く話しかけてきた。

このスペイン生まれのデザートと絶妙にマッチするのがチョコラテなのである。チョコラテはフレンチ，スパニッシュ，メキシコと名づけられ３種類あり，唐辛子風味の甘くないチョコラテがチョロスとは非常によくあうのである。日本でもジャン・ポールエヴァン，パスカル・カフェなどフランス出身の高級チョコレート店がホットチョコレートを提供し話題となっているが，チョコレートは日本ではまだまだ菓子というイメージが強いのではないかと思う。メキシコでは菓子としてだけではなく，モーレソース（チョコレートをベースに何種類もの唐辛子などのスパイス・ナッツなどを混ぜたメキシコ料理の定番のソースで，メキシコシティ近郊のプエブラの名物）の原料として利用されたり，飲料として飲むことも一般的

チュロスを味わう筆者

チュロスを揚げる職人

なのである。チョコレートは欧州発と思われているが，チョコレートの原料カカオは中南米産であり，古代メキシコのアステカ族はカカオ豆をアステカ文明の神ケツァルコアトルの授けた万能薬として珍重していたそうである。

メキシコの高原都市は美しい。ぜひ，美しいコロニアル・シティーを訪れて，宗主国スペイン生まれのチョロスとメキシコの植民地時代以前の伝統を受け継ぐチョコラテを味わってみてはいかがでしょうか。メキシコの歴史の一端が感じられると思います。

最も長い英単語

経営学部
安藤　聡

ある日レディングからベイズィングストウクに向かうローカル線にひとりで揺られていた。終点に近い小さな駅から，妙に背の高い労働者階級風の青年が乗ってきた。車内は空いていたが，青年は何故か私と向かい合わせの席に座った。だがもうすぐ降りるのだし，この手の連中はどうせ聞き取りにくい英語を話すに決まっているので，話しかけられると面倒だから私は彼と目を合わせないようにしていた。すると唐突に彼は，「一番長い英単語は何か知ってるか?」と問いかけて来た。訛りは強いが聴解に支障を来すほどひどい発音でもなかったので，私は聞こえないふりをすることなく会話に応じることにした。「floccinaucinihilipilificationだろ」と私が答えると，青年は「違う，antidisestablishmentarianism だ」と言う。私は floccinaucinihilipilification の方が一文字多いこと（前者は29文字，後者は28文字）を知っていたので，彼の思い違いを正してやろうとしたが，彼の方から矢継ぎ早に「どこから来た？」とか「留学か，仕事か？」などと質問を連発して来たので，「日本からだ」，「仕事でレディング大学に来ている」などと答えているうちに列車はベイズィングストウクに到着してしまった。青年は「話が出来て楽しかったよ」と言い残して去って行ったが，私には釈然としない気分が残った。

この floccinaucinihilipilification という語は18世紀の詩人・随筆家ウィリアム・シェンストン(1714〜63) の造語と考えられている。意味は「軽視すること」，「無価値と判断すること」である。シェンストンは1741年のある日友人宛に書いた手紙の中である人物について，「私が彼を好きだったのは，とりわけその金を何とも思わない態度のゆえだ。」（I loved him for nothing so much as his flocci-nauci-nihili-pili-fication of money.）と書いている。ここでこの詩人はハイフンを入れて綴っているので語源がよりいっそう明確になるが，flocci はラテン語で「羊毛の房」から転じて「軽いもの」とか「価値のないもの」，nauci は同じくラテン語で「つまらないもの」，nihili もラテン語で「無」(参考までに ‘nihilism’ は「虚無主義」)，pili は「毛」から転じて「些細なもの」，-ification は「〜化すること」である。つまりシェンストンが手紙の中で言及している「彼」という人物は，金というものを「一房の羊毛か一本の毛のごとく軽く，取るに足らない無価値なものと判断していた」のである。シェンストンが何故このような単語を思いついたかというと，一説によれば，名門パブリック・スクールであるイートン・コレッジのラテン語の単語帳に，‘flocci’，‘nauci’，‘nihili’，‘pili’ がこの順序で並んでいたことに由来するという。そう言われて見ると，確かにアルファベット順になっている。

おそらくはシェンストンの書簡集を読んで真似たのであろうが，詩人ロバート・サウジー